

熊本県球磨方言の接辞-jor-と-jar-

小野綾子

new2017a@gmail.com

キーワード：球磨方言 -jor- -jar-

要旨

本稿は熊本県人吉・球磨地方で話されている球磨方言の接辞-jor-, -jar-の例をあげる。-jor-, -jar-は話し言葉にでてくる接辞であるため、本稿に先立ち 501.6 分の話し言葉コーパスを作成した。本稿の例は全てそのコーパスから抜き出したものである。

-jor-は経験や習慣を表し、人と無生物に使う。一方、-jar-は発話者以外の人と無生物に使う。このとき、発話者が-jar-で表す行為者に対してネガティブな印象を持つ。また、発話者自身の遠い過去（ここでは 60 年以上前）のネガティブな行為を表す例にも見られた。

1. はじめに

本稿は熊本県人吉・球磨地方で話されている球磨方言の接辞-jor-, -jar-について述べる。これらの接辞は動詞の語根に単独で続く場合と、-jor-と-jar-が組み合わせられることがある。それぞれが単独でどのような意味をもつのかを述べ、さらに組み合わせられるときの例を紹介する。なお、本稿で扱う例は筆者の作成したコーパス（501.6 分）から抜き出し、なるべく前後の発話状況や内容にも言及する。

1.1. 人吉・球磨地方

本論で扱う人吉・球磨地方は九州、熊本県の東南に位置し、宮崎県と鹿児島県に接している地域である。この地域で話される言葉を以下、球磨方言（通称、球磨弁）という。

1.2. 本稿で用いた文字化資料の説明

1.2.1. 言語資料

本稿で例文に使うものは、年代の異なる 6 つの録音（計 501.6 分）を文字化したものによる。話者は、三姉妹 L1（1915 生）、L2（1920 生）、L3（1925 生）、男性 M（1935 生）である。録音資料 kb.5、6 には筆者も最初の挨拶などではあるが、会話に参加している。

表 1. 録音資料一覧

ファイル名	日付	録音時間	収録者
kb.1	1996年2月11日	101'05"	前田一洋
kb.2	1998年4月9日	92'08"	前田一洋
kb.3	1999年3月31日	51'00"	前田一洋
kb.4	1999年(日付なし)	87'05"	前田一洋
kb.5	2004年7月30日	146'02"	前田一洋、小野綾子
kb.6	2005年7月29日	22'06"	前田一洋、小野綾子

例文としてなるべく上記から挙げたが必要に応じてネイティブチェックを行った。

1.2.2. 表記法

本稿では目的に応じて形態素や文のまとまりの訳は省いた。筆者は助動詞、形容動詞という品詞は立てておらず、助動詞に関して本稿では接辞として扱っている。日本語の文法研究をする上で、品詞をどのように立てるか、さらに、語幹、語基、語根をどのように設定するかは葛藤がある(日本語文法学会編 2014: 176, 310, 323, 207, 224, 225; 亀井ほか編 1996: 544)。動詞の接辞については日本語文法学会編(2014: 315)を参照した。

本論では形態素分析をしやすいという理由で、角田太作(1998: 999)を参考に、語根+接辞という考えで形態素分析を行っている。なお、角田三枝(2007)を参考にして、本稿では「つなぎ」の役割をするものを「つなぎ接辞」「-つ-」と表記している。

球磨方言は接辞が多く活用も複雑である。接辞の中には、もともとは別の意味を持つ動詞や語が複合し、使われるうちに慣習化したと考えられるものもある。また、本来の意味を失い、新しい意味を得たものもみられる。球磨方言の接辞の多くは高年層世代の自然な会話に多くでくる。そのため、本稿では高年層世代に限定して考察した。

略語は次のとおりである。これらは今後再考すべきだが、本稿では以下にしている。名：名詞、形：形容詞、動：動詞、繋：繋辞、連：連体詞、感：感動詞、接：接続詞、間：間投詞、テ：動詞のテ形、敬：敬称、頭：接頭辞、擬音：擬音語、擬態：擬態語、擬声：擬声語、順：順接、逆：逆説、否：否定、過：過去、尊：尊敬、卑：軽卑語、条：条件、可：可能、使：使役、丁：丁寧、推：推量、命：命令、同：同意、疑：疑問、経：経験、程：程度、序：序数、つ：つなぎ接辞。

なお、助詞は4つであり、格助：格助詞、副助：副助詞、接助：接続助詞、終助：終助詞に分けている。

6つの録音資料(kb.1~6)は、一人一回の発話を一行とし番号をつけ、un="数字"が行数を表している。sp="話者の名前"であるが前述のとおり、L1(1915生、女性)、L2(1920生、女性)、M(1935生、男性)として表す。

表記の例の全情報を表示した以下の例の意味は、発話保存ファイル番号(kb.3)、846行目、話

者は L1 である。形態素に分け、意味のまとまりで訳をつけ、「」は共通語訳である。なお、全ての用例を通して、拗音、ヤ行は /j/、撥音 /N/、促音/Q/、融合「:」で表す。

例 <u n="846" sp="L1"> (kb.3)

/ kuruma=na /

名=終助

車ね

「車ね」

2. 先行研究

方言を扱った先行研究において、「トル」、「ヨル」に言及しているものに、村上 (2004a, b)、丹羽 (2005) がある。テンス・アスペクト・ムードについては、尾上 (2001, 2004)、木部 (2004)、金田一 (1952)、工藤 (2004, 2010)、時枝 (1954)、渡辺 (1974) がある。なお、これらは日本語共通語や諸方言を扱ったものであるため、球磨方言とは意味や用法が異なるが、様々な事例があったため一部参考にした。

3. 本論

球磨方言の発話にあらわれる -jor-, -jar- は、次のように使われる。

- (1) nom-u. (私が、人・動物が) 飲む。
- (2) nom-i-jor-u. (私が、人・動物が) 飲んでいる。
- (3) nom-i-jar-u.
(遠い昔の私・私以外の人・動物・が) (勝手に、思いがけず、私の予想をこえて)
飲む。飲んでいる。飲むことができる。

-jor-, -jar- はそれぞれ単独で使われる場合と、-jor-, -jar- を組み合わせて使うことがある。
-jo-i-jor-, -jo-i-jar-, -ja-i-jor-, -ja-i-jar- など。(詳しくは 2.1.2 節を参照願う)

なお、本稿では、-jor- と -jar- の比較をしたいため、-or-, -nar-, -nahar- など、いわゆる「オル」「ナル」「ナハル」については言及しない。

ここで上げる発話例は、発話者 L2 (1920 生 女性) とその姉 L1 (1915 生 女性) が子供時代のことを M (1935 生 男性) に話しているところである。

-jor- と -jar- の大きな特徴として、主語の違いがある。-jar- に関しては、発話者の気持ちを乗せるときに使うことが多い。そのため、本稿では、主語を中心に分けている。

-jor- も -jar- も人や動物と無生物が主語になる。-jor- は発話者も主語になりうるが、-jar- は発話者自身が主語にならない。しかし、発話者自身が主語になる場合の例外がある。それは、遠い過去の自分の行動を表し (ここでは、80 代の発話者が 10~20 代のとき、つまり 60 年以上も前

であった)、かつ、それがネガティブな状況であるとき、自分自身に対しても他者の好ましくない行動を表す-jar-を使って発話することがわかった。

以下 3.1 節では、3.1.1 節で-jor-が単独でてくる場合、3.1.2 節で-jar-が単独でてくる場合の例を話し言葉コーパスから抜き出した。-jar-の場合は地域差がみられるため、簡単な説明を加えた。さらに、主語によって (a) 人、(b) 無生物で分け、(a-1) 発話者自身が主語、(a-2) 発話者以外が主語とした。3.2 節では、-jor-と-jar-が組み合わさる場合について例を挙げる。3.2.1 節は-jor-, -jor-, 3.2.2 節は-jor-, -jar-, 3.2.3 節は-jar-, -jor-, 3.2.4 節は-jar-, -jar-について、コーパスの中で見られる発話を挙げ、内容に言及した。

3.1. 単独でてくる場合

3.1.1. -jor-について

主語は発話者と発話者以外の人や動物、さらに無生物がある。

人や動物の場合

- (4) kaer-u. 帰る
- (5) kaeQ-ta. 帰った
- (6) kaer-i-jor-u. (今) 帰っている。
- (7) kaer-i-joQ-ta. 帰っていた。帰っていたことがある。

無生物の場合

- (8) hur-i-jor-u. (雨が) 降っている。
- (9) hur-i-joQ-ta. (雨が) 降っていた。降っていたときもあった。

以下は、筆者が作成した 501.6 分の話し言葉コーパスから抜き出したものである。可能な限り状況も合わせて載せる。

(a) 人が主語

(a-1) 発話者自身が主語のとき。

L2 が M に子供時代のこと話している。L1、L2 姉妹の母は三味線弾きで御座敷にあがっていたという話。L2 もついて行き唄っていた。習慣を表している。

(10) <u n="380" sp="L2">

/hoQde o=mo ti-i-te-ik-i-joQ-ta=tai/

接 代=副助 動-つ-テ-動-つ-jor-過=終助

それで 私も 付いて行ったよ

「それで、私も (母に) 付いて行ったよ」

(a-2) 発話者以外が主語

(a-2-1) 主語は発話者の母親。

L1, L2 姉妹の母親が縫いものをしていたという話。M からの問い「お母様は何を作っていたのか？」に対する答えである。習慣を表している。ザツノーというのは、当時の袋だったらしい。

(11) <u n="208" sp="L2">

/zjaQ zjaQ zjaa-r-oo zatunoo=wa moo hoNto nu-i-joQ-ta-ro=naa/
 感 感 繫-推 名=副助 感 感 動-つ-jor-過-推=終助
 そう そう だろう ザツノーは もう 本当 縫っていたらうね
 「そう、そう、だろう。ザツノー（袋）は、もう、縫っていたらうね」

(a-2-2) 主語は発話者の妹。

(Mの前で) 姉 L1 が妹 L2 に、子供時代の思い出話をしている。「(あなた L2 は) 足が速かったよね」と語りかけている場面である。経験を表している。

(12) <u n="297" sp="L1">

/ome=wa uNdookai=deN naN=deN hasir-i-joQ-ta=de=tai/
 代=副助 名=副助 名=副助 動-つ-jor-過=終助=終助
 あなたは 運動会でも 何でも 走っていたよね
 「(妹である L2 に) あなたは運動会でもなんでも走ってたよね」

(a-2-3) 主語は人と無生物

L2 姉妹が子供時代に駄菓子屋に行っていた話である。M の問い「何を買っていたのか？」に対する返答である。「(飴を) つけていた」tuk-u-joQ-ta と tuk-e-joQ-ta に関しては、おそらく、tuk-e-joQ-ta が正しい。tuk-u-joQ-ta は発音のまま文字おこしをしている。主語は店主である。

一方、ki-joQ-ta=na 「(飴が) きていたね」の主語は飴である。当時は 1 銭で飴が 3 つ買えたことを伝えている。飴が主語になり、無生物とも考えられる。言い直していることから、この文脈では、飴という無生物が主語になる方が自然なのかもしれない。

(13) <u n="244" sp="L2">

/soN-koro=wa iQ-seN-zja=moN=na aQ-doN=ga damadama iQ-seN=ni
 連-名=副助 名-序数-繫=終助=終助 代-敬=格助 名 名-序数=格助
 そのころは 1 銭だもんね あの人が 飴玉 1 銭に

itu-tu tuk-u-joQ-ta=de ame=doma iQ-seN=ni jaQpa miQ-tu=baQka
名-序数 動-つ-jor-過=終助 名=副助 名-序数=格助 間 名-序数=副助
5つ つけてたよ 飴など 1 銭に やっぱり 3 つばかり

tuk-e-joQ-ta ki-joQ-ta=na hutok-a-to=no /
動-つ-jor-過 動-jor-過=終助 形-つ-名=格助
つけていた きていたよ 大きいのが

「その頃は 1 銭だもんね。あの人（飴売りの人）が、飴玉 1 銭に 5 つつけていたよ。飴など、1 銭に、やっぱり、3 つばかりつけていた。（飴が）きていたよ。大きいのが」

(b) 無生物が主語

(b-1) 主語は運動会。

行事などのできごと。L1、L2 姉妹が子供時代に経験した運動会の話をしている。慣習を表す。

(14) <un="344" sp="L2">

/nigiwa-i-joQ-ta=de=na uNdookai=mo /

動-つ-jor-過=終助=終助 名=副助

賑わっていたよね 運動会も

「賑わっていたよね。運動会も」

3.1.2. -jar-について

主語は人や動物と無生物がある。

-jar- については地域差がある。上球磨（多良木町、水上村、湯前町、あさぎり町）と下球磨（人吉市、錦町、球磨村、五木村、相良村、山江村）では、-jar-が現れると意味が逆になる。

上球磨では-jar-の主語に対して「ポジティブ」な意味を持つが、下球磨では「ネガティブ」「意外性のある」意味になるという。（例文チェックと説明は人吉市在住、前田一洋氏による：2018.9.17）

人や動物が主語

(15) kaer-i-jar-u

上球磨：（ありがたいことに、相手が）帰ろうとしている。帰っている。

下球磨：（相手が勝手に）帰ろうとしている。帰っている。

(16) kaer-i-jaQ-ta

上球磨：（ありがたいことに、相手が）帰った。帰ってしまった。

下球磨（相手が勝手に）帰った。帰ってしまった。

無生物が主語

(17) hur-i-jar-u

上球磨：(ありがたいことに) 降ってきた。降っている。降りそう。

下球磨：(迷惑なことに) 降ってきた。降っている。降りそう。

ame=no hur-i-jaQ=bai.

上球磨：(ありがたいことに) 雨が降っているよ。降りそうよ。

下球磨：(迷惑なことに) 雨が降っているよ。降りそうよ。

(18) hur-i-jaQ-ta

上球磨：(ありがたいことに) 降った。(降ってきた。降ってくれた。)

下球磨：(迷惑なことに) 降った。(降ってきた。雨に降られた。)

ame=no hur-i-jaQ-ta=bai.

上球磨：(ありがたいことに) 雨が降ったよ。(降ってきたよ。降ってくれたよ。)

下球磨：(迷惑なことに) 雨が降ったよ。(降ってきたよ。雨に降られたよ。)

(19) basaN=no ki-jaQ-ta=bai

名-敬=格助 動(来る kur-)-jar-過去=終助

(上球磨)「(ありがたいことに、嬉しいことに) おばあさんが来たよ」

(下球磨)「(迷惑なことに、困ったことに、意外なことに) おばあさんが来たよ」

なお、本稿の話し言葉コーパスにでてくる話者は全て人吉市(下球磨)で生まれ育ったため、-jar-はネガティブな要素を含んでいる。以下は話し言葉コーパスに出てきた実際の発話である。

(a) 人が主語

(a-1) 発話者以外が主語。

-jar-がでてくるとき、発話者以外が主語であることが一般的である。

(a-1-1) 主語は発話者の父親。

発話者 L2 が、自分の父親が作る料理の話をしている。-jar-は発話者である娘の思いを越えた父親の行動を表している。勝手に父親がしている行動について話している。

(20) <u n="224" sp="L2">

/hoNto aju=no iwo=deN ida-de=mo=tai toQ-te ki-te jugawa=de=na
 感 名=格助 名=副助 動-テ=副助=終助 動-テ 動-テ 名=格助=終助
 本当 鮎の 魚でも 行ってもよ 取って きて 川=で=ね

siwo=de aroo-te but-u-giri=ni si-te=na mata su-miso=de kw-as-e-jaQ-to=no
 名=格助 動-テ 動-つ-動=格助 動-テ=終助 副 名-名=格助 動-使-つ-**jar**-名=格助
 塩で 洗って ぶつ切りに してね また 酢味噌で 食べさせるのが
 umak-a-gotaQ=moN=na koriNkoriN si-te=tai uN hoosite waja hoNto /
 形-つ-経=終助=終助 擬態 動-テ=終助 感 接 感 感
 美味しかったよね コリンコリン してよ うん そして ほら 本当
 「本当。鮎の・・・、魚でも、行ってもよ、取ってきてね、川でね。塩で洗ってぶつ切りに
 してね。また、酢味噌で食べさせるのが美味しいよね。コリンコリンしてよ。うん、そし
 て、ほら、本当」

(a-1-2) -jar1-の主語は発話者の母親。-jar2-の主語は人一般。

発話者 L2 が母親と過ごした子供時代のことを回想しながら、M に話している。意味は「母親の料理にはとてもかなわなかった」という内容である。

(21) <u n="192" sp="L2">

/so baQteN names-i=tjari ba-saN=no dagoziru=doN si-jaQ-ta ba-saN=no
 代 接 動-つ=接助 名-敬=副助 名=副助 動-**jar**-過 名-敬=格助
 そう だけど なめしたり 母さんは 団子汁など してた 母さんは
 kat-i-**jar**-e-N-zjaQ-ta=bai zjoozu-zja-ta=moN /
 動-つ-**jar**-つ-否-繫-過=終助 名-繫 -過=終助
 勝たなかったよ 上手だったよ

「そうだけど、母さんは（着物など）なめしたり、団子汁などしていた。（誰も）お母さんには勝たなかったよ。（お母さんは）上手だったよ」

(a-1-3) 主語は発話者の父親。

下球磨出身の発話者が父親の行動について話している。この発話の意味は、発話者 L2 姉妹の父親がいつも怒っていた、という内容である。好ましくないと発話者が判断している他者（ここでは父親）の行動を表すときに-jar-を使っている。

(22) <u n="410" sp="L2">

/so baQteN a gjaN itumo katumo ogo-i-**jar**-e-ba /
 連 接 連 連 副 副 動-つ-**jar**-つ-条
 そう だけど あんな いつも かつも 怒っていれば
 「そーだけど、（父は）あんないつでも怒ってれば」

(a-1-4) 主語は発話者の母親。

L1 が自分の母親の気持ちを慮って発話している。意味は、「(母は) 夫に束縛されて、自由に外出できなかった」という内容である。行きたかったけれど行けない状況(残念な)を表す。自由に動けない母親に対して気の毒な思いが-jar-に現れている。

まず、可能の動詞 nar-u を否定 (-N-) し、行くことができない、という行動を伝えている。さらに、他者のことを考えず勝手に行動できる意味を持つ-jar-を否定 (-N-) している。

(23) <u n="391" sp="L1">

Ik:ja-na-N-jar-e-N toki ook-aQ-ta=moN/

動:副助-動(可能)-否-jar-つ-否 名 形-つ-過=終助

行けない とき 多かったもん

「(父親が母親の外出を嫌うので、お母さんは三味線に) 行くことができないとき多かったもん」

(a-1-5) 主語は発話者の両親。

発話者 L2 の発話である。両親が「まだ生きていてくれたら」と M に話している。叶わない気持ちを表す。

(24) <u n="394" sp="L2">

/so baQteN naa ima=domo wa=ja geNki=de=doN iku-tu=ni naQ-te=mo

連 接 感 名=副助 名=格助 名=格助=副助 名-序=格助 動-テ=副助

そう だけど ねー 今など あの人たちが 元気でなど 幾つに なくても

i-jar-e-ba naN=deN koo-te kuw-a-ser-u-i=doN/

動-jar-つ-条 名=副助 動-つ-テ 動-つ-使-現-つ=接助

いたら 何でも 買って 食べさせられるのに

「そーだけど、ねー。今など、あの人たち(発話者の両親)が元気で(など)、幾つになっても(生きて)いたら、何でも買って食べさせる(ことができる)のに」

(a-2) 発話者が主語。

(a-2-1) 主語は子供時代の L2 自身。

発話当時 80 歳くらいだった L2 が 7~8 歳当時のことを話している。約 70 年前の自分自身である。子供時代、薪ひろいに行かされ、子供だったからたくさんかついでこられなかった、という話をしている。したかっただろうけれど、できなかったという意味である。

(25) <u n="358" sp="L2">

/ takusja=wa inu-u-te ki-jar-a-N=to-zja=de=na (略)

副=副助 動-つ-テ 動-jar-つ-否=接助-繋=終助=終助

沢山は 担いで 来られないのだからね

「沢山は(薪を)担いで来られないのだからね。(略)」

参考として、発話当時の発話者自身の行動を表すときは次 (26) のような発話になる。この場合、ネガティブな意味は持たないため、-jar-ではなく、-jor-を使っている。

(26) kb.5 <u n="2849" sp="L2">

/ (略) sekihan=deN nan=deN haQsjo=kara oi=mo si-joQ-ta=moN=naa /

赤飯でも なんでも 八升から 私も していたからね

40年ほど前のことを回想しながらの発話である。祭りの前の準備について、筆者に説明している。準備は大変だったけれど、祭りは賑わって楽しかったという内容である。

(a-2-2) 主語は発話者を含む兄弟。

L2 (1920 生) が M (1935 生まれ) に昔はよかったという話をしている。-jar-の主語は発話者を含んでいる。ここでは75~80年前の話であり、それぞれの行動について-jar-で表していると考えられる。

(27) <u n="174" sp="L2">

/ jok-aQ-taa moo hoNtoN sosite eroo nan-oQ-ta baQteN

形-つ-過 感 感(同) 接 副(程度) 接頭-動-過 接

良かったー もー 本当 そして 随分 いた けれど

kjoodai-genka=domaa oma se-N-jaQ-ta=na utjaa /

名-名=副助:副助 感 動-否-jar-過=終助 名:副助

兄弟喧嘩などは あなた しなかったね うち[我が家]は

「良かったー、もー、本当。そして、すごく(たくさん兄弟姉妹が)いたけれど、兄弟喧嘩なんてしなかったね、うち(L1, L2 姉妹の兄弟姉妹)は」

3.2. -jor-と-jar-が組み合わさる場合

-jor-, -jar-は複数組み合わされることがある。ここでは、話し言葉コーパス上で出てきた例を挙げる。

3.2.1. -jor-, -jor-

(a) 人が主語

(a-1) 発話者自身が主語。

(a-1-1) 主語は子供時代の L2 自身。

L2 が M に子供時代のことを話している。-jor-を重ねることで、同じ習慣でも繰り返しが多かったことを表していると考えられる。

(28) <u n="307" sp="L1">

/ kubomego inu-u-te=na ik-i-jo-i-joQ-ta /
 名 動-つ-テ=終助 動-つ-jor-つ-jor-過
 クボメゴ 担いでね 行っていた
 「クボメゴ（籠を）担いでね。行っていた」

(a-2) 発話者以外が主語のとき。

(a-2-1) 主語は L2 の父親。

(29) <u n="563" sp="L2">

/ sono-jo-na jorokobi=t:j-u=wa¹ nak-a=de sjotjuu=wo kaQpu=de
 連 名=格助:動:名=副助 形-つ-終助 名=格助 名=格助
 そのような 飲みというのは ないよ 焼酎を カップで
 uQ-tjo-i-joQ-ta²=de=na /
 頭-動-jor-つ-jor-過=終=終 (消す)
 飲んでいたよね

「そんな飲みというのはないよ。(父は) 焼酎をカップで飲んでいたよね」

(b) 無生物が主語

(b-1) 主語は下駄である。

L2 が子供時代に使っていた下駄が主語である。当時の下駄はすぐダメになっていたという話である。どの下駄をはいてもダメになる (hater-u) という繰り返しの事実を表している。

(30) <u n="240" sp="L2">

/ hate-te kure-jo-i-joQ-ta=de=na geta=tai /
 動-テ 動-jor-つ-jor-過=接助=終助 名=終助
 果てて くれてたからね 下駄よ

¹ jorokobi 「飲み」=to 「と：格助詞」、i-u 「いう」、no または N 「の（こと）」が消失、=wa 「は：副助詞」である。

² uQ-は ok-u 「おく：動詞」につく接頭辞、-i-が-jor-とのつなぎ、-ta は過去形を表す。

「ダメになっていたからね、下駄よ」

3.2.2. -jor-, -jar-

主語は発話者以外である。

(a) 人が主語

(a-1) 発話者以外が主語。

(a-1-1) 主語は L1 の父親。

L1 が M に話している。L1 が子供のころ、父親が料理 (団子汁) をしていたという内容である。
-jor-は習慣を表す。-jar-は父親の行動である。発話者とは無関係に行為者が自発的に行う行動に対して-jar-が使われている。-jor-と-jar-を組み合わせることで、相手が自発的 (-jar-) に行う習慣的 (-jor-) なできごとを表している。

(31) kb.5 <u n="0610" sp="G1">

/ si-jo-i-jaQ-ta=naa hoNtoN /
動-jor-つ-jar-過=終 連
していたなー ホント
「(料理を) していたなー。ホント」

(a-1-2) 主語は L1 の父親。

L2 が里帰りしたときの父親の行動について、M に話している。「必ず」とあるので、習慣的な内容を表す。-jor-は習慣を表し、-jar-で他者 (この場合は父親) の行動を表す。実家に帰省すると、父親が必ずご飯を炊いて食べさせてくれていた、という内容である。

(32) <u n="120" sp="L2">

/ zi-saN=no mo kanarazu misi tjaQ-te=no ziki
名-敬=格助 感 副 名 動-テ=終助 副(程度)
父さんが もー 必ず 飯 炊いてね すぐ
hagama=ba kak-e-jo-i-jaQ-ta=moN mesi kuw-as-e-jo-i-jaQ-ta=na /
名=格助 動-つ-jor-つ-jar-過=終助 名 動-使-つ-jor-つ-jar-過=終助
釜=を かけていたの 飯 食べさせていたよ
「父さんが、もー、必ず、ご飯を炊いてね、すぐ。ご飯食べさせてくれたよ」

(a-1-3) 主語は L2 の父親。

L2 が子供のころ、運動会で父親から言われていたことについて、M に伝えている。ここでは、父親が子供に「ずるをさせる」内容である。「ヨーイドンという前から、片方の足は前に出しておきなさい」と父親が娘に言い聞かせていた、という内容である。これは-jar-を使うことで、良

い意味ではないということを伝えている。-jor-は習慣的に父親がそう言い聞かせていたということ伝えている。

(33) <u n="330" sp="L2">

/zi-saN=na ue ik-a-se-jo-i-jaQ-ta maada

名-敬=副 名 動-つ-使-jor-つ-jar-過 副(程)

父さんは 上 行かせた まだ

jooitoN=te iw-aN-uti=i iQ-po=wa

擬声=格助 動-否-名=格助 名-序=副

ヨーイトンて 言わないうちに 一歩は

zjaa=tok-a-N-baa=ti (略)/

名=格:動-つ-順-条=接

そんな風で置いてなければと

「父さんは(子供たちを)上(の方)に行かせた。まーだ、「ヨーイトン」って言わないうちに、一歩は(前に用意)しておかなければ、と(略)」

3.2.3. -jar-, -jor-

主語は発話者と周囲の人々である。

(a) 人が主語

(a-1) 発話者を含む人一般が主語。

(a-1-1) 主語は L1 の父親。

(34) <u n="1761" sp="G2">

/soQta=ba oohasi=no uje=de=t:ii-ja-i-joQ-ta moo

連=格助 名=格助 名=格助=格助:動-つ-jar-つ-jor-過 間

それを 大橋の 上でと言ってた もう

soN-koro-zjaQ=de moo naN-sam:a siti hatijziuu-neN-mae-zjaQ=de=na/

連-名-繫=終助 間 名-接尾=副助 数 数-名-前-繫-終助=終助

そのころだよ もう なん 7 80年前だよ

「それを大橋の上でと言ってた そのころなのよ もうなんといっても 70~80年前だよ」

naN-sam:a について。naNは「何」という名詞であり、sama は sami という接尾辞に副助詞の=aがついたものである。sami は方向、時間、などあいまいなときにつくことが多い。

3.2.4. -jar-, -jar-

主語は発話者以外である。

(a) 人が主語

(a-1) 発話者以外が主語。

(a-1-1) 主語は L2 の父親。

ここでは、発話者にとって行為者である父の好意が好ましくなかった。まず、父の自発的な行為に対して最初の-JAR-は使われている。次の-jar-は発話者にとって好ましくない父の行動に対して-jar-を使っている。

(35) <u n="312" sp="L2">

/zi-saN=na moo uNdookai=na moo hjuu muk-e-te nom-i-ja-i-jaQ-ta
名-敬=副助 感 名=副助 感 名 動-つ-テ 動-つ-jar -つ-jar -過
父さんは も一 運動会は も一 尻 向けて 飲んでいて

kimoN ki-te komoN ki-te-zjaQ-ta=de=na /
名 動-テ 名 動-テ-繫-過=接助=終助
着物 着て 小紋 着てだったよね

「父さんは、も一、(子供の) 運動会は、も一、尻向けて (焼酎ばかり) 飲んでいて。着物着て、小紋着てだったからね」

4. まとめ

本論では、人吉・球磨地方で使われている球磨方言の中の、-jor-, -jar- について、話し言葉コーパス中の発話から例を挙げ考察した。

-jor- は主に習慣的な過去の行為や行動、慣習に使われている。-jar- を使う場合、発話者が発話文中の他者の行動に対して、相手が自発的になにかをやっているということを伝えたいとき、また、発話者にとって相手の行為が好ましくないときに使う。そのため、主語が誰であるかということを本稿で述べることにした。-jar- に関しては、非常にまれな例であるが、遠い過去の発話者自身である例があった。この発話は若い世代にはもうない。

-jor-, -jar- を用いなくても文として成立する場合もある。しかし、わざわざこれらをつけるということは、発話者に意図があるはずである。球磨方言話者たちはこのような接辞を使い分けて、相手との距離を図っているのかもしれない。

今回は話し言葉コーパスに出てくるものを中心に例をあげるにとどまった。このたび東京大学言語学研究室における研究会において、-jor- がどのような動詞につくか調べるといいかもしれないという有益な意見をもらい、今後の調査に加えたいと考えている。また、紙面の関係上、-jor-, -jar- の位置にでてくる -or-, -nar-, -nahar-, -kir- については全て省いた。今後、それらとの関係についても公表したい。

参考文献

尾上圭介 (2004) 『文法 II』(朝倉日本語講座 6) 東京：朝倉書店。

- 尾上圭介 (2001) 『文法と意味 I』 東京：くろしお出版.
- 小野綾子 (2010) 「熊本県球磨方言の動詞と助詞の研究」 博士論文, 東京大学.
- 亀井孝、千野栄一、河野六郎 (編) (1996) 『言語学大辞典 第6巻 述語編』 三省堂.
- 木部暢子 (2004) 「福岡地域のアスペクト・待遇・ムード」 工藤真由美 (編) 『日本語のテンス・アスペクト・ムード』 東京：ひつじ書房.
- 金田一春彦 (1952) 『日本語方言の研究』 東京：東京堂出版.
- 工藤真由美 (1991) 「アスペクトとヴォイス」 鈴木重行 (代表) 「現代日本語のテンス・アスペクト・ヴォイス」 5-40. 1988-1990 年度科学研究費報告書 一般研究 (B) 課題番号 63450058.
- 工藤真由美 (2004) 「青森県五所川原方言の動詞のアスペクト・テンス・ムード」 工藤真由美 (編) 『日本語のアスペクト・テンス・ムード体系 標準語研究を超えて』 120-133. 東京：ひつじ書房.
- 工藤真由美 (2010) 「方言接触から見た存在動詞とアスペクト」 上野善道 (監) 『日本語研究の12章』 71-83. 東京：明治書院.
- 高田素次 (1956) 『新球磨風土記』 熊本：日本談義社.
- 角田太作 (1998) 「オーストラリア原住民語」 『言語学大辞典 第1巻 世界言語編 (上)』 東京：三省堂.
- 角田三枝 (2007) 「日本語の動詞の活用表」 『立正大学國語國文』 45:1-7.
- 時枝誠記 (1961 [1954]) 『日本語文法文語論』 東京：岩波書店.
- 丹羽一彌 (2005) 『日本語述語動詞の構造』 東京：笠間書院.
- 日本語文法学会 (編) (2014) 『日本語文法事典』 大修館書店.
- 服部四郎 (1967 [1960]) 「附属語と附属形式」 『言語学の方法』 東京：岩波書店.
- 村上智美 (2004a) 「形容詞に接続するヨル形式について」 工藤真由美 (編) 『日本語のアスペクト・テンス・ムード体系 標準語研究を超えて』 188-203. 東京：ひつじ書房.
- 村上智美 (2004b) 「熊本方言における「寂ツツスアシトル、高シャシトル」という形式について」 工藤真由美 (編) 『日本語のアスペクト・テンス・ムード体系 標準語研究を超えて』 204-218. 東京：ひつじ書房.
- 工藤真由美 (2005) 「熊本県宇城市松橋町方言の形容詞」 「方言における述語構造の類型論的研究 II」 大阪：研究成果報告書.
- 山口幸洋 (1984) 「愛知県南知多方言の不特定過去表現について」 広島方言研究所 (編) 115-133. 『方言研究年報 通巻 26 巻』 大阪：和泉書院.
- 渡辺実 (1997 [1974]) 『国語文法論』 東京：笠間書院.

謝辞

本稿は東京言語研究所の尾上圭介先生の講義にヒントを得て 2017 年にレポートとして作成した一部を加筆修正したものである。東京大学人文社会系研究科の西村義樹先生にご助言を賜り、言語学研究室における研究会での助言にも感謝いたします。また希少言語や方言に関して

Professor Peter Flaherty、インフォーマントの方々にも感謝いたします。

Usage of *-jor-* and *-jar-* in Kuma Japanese

Ayako Ono

new2017a@gmail.com

Keywords: Kuma Japanese, *-jor-*, *-jar-*

Abstract

This study introduces the two affixes *-jor-* and *-jar-* used in the Kuma dialect, which is spoken in the Hitoyoshi Kuma area of Kumamoto Prefecture in Japan. Since *-jor-* and *-jar-* are items that appear in spoken language, a 501.6-minute spoken corpus was created prior to this study. All the examples used are taken from this corpus.

-Jor- is used to talk about experiences and customs involving people and inanimate objects. On the other hand, *-jar-* is used for people other than the speaker and for inanimate objects. When the speaker has a negative impression of the actor, *-jar-* is used to express that impression. The affix is also found in examples in which the speaker talks about her own negative actions in the distant past (in this case, over sixty years before).

(おの・あやこ 東京大学研究員)